

~ 13
3104
2



門 八 13
3104
巻 2

席上奇觀垣根草二之巻

在原業平文海は詠く室と詠ふる事

天文の頃都相國寺に文海と云僧の禪誦の暇和歌と云の道
遥院殿のいへに長林は文字禪乃風韻と云く一時の奇才あり

其頃西河守家義時が治世に連年干戈息時云く西園中國

之内を初的確執東園に北条今川北陸の山田長尾の合戦を

あ將軍家も都を没落く云治中の勅乱又幕代は頼み事

なまはに奉守も天文二十五年七月兵火にかり禪堂法堂

残る云く焼とせり云文海は安居に云く衣袴と収て東園公

かぞへ行脚して此彼と云く遊歴する云四五十年も経たり

云流石都もあつて縁と興へ伊勢路よからと云神宮に宿

直長草卷三

昭和九年
七月三日
購求

法施奉り又より大和路よりて若野の花とも目をむか
 分多るの頃彌生の末に花もつづる教養の思ひも喜
 ぶくもくど山澤へ入る日雨は沈まきまに後を花より
 外に知人もあらず中をこそとてゆく迷行も人あらず
 花と今宵のまをせんはく相の所もあのおもき花のか
 ずにもあにぞぬ人家のわんを漸たらばはまき本まう
 りきわらに殿造りしころはくはく難いなる人あらず
 大海のやまを軒のまを排個て内を寝る子あらずあ
 詩といやういん投宿とてまを暫あつて出て案内するは
 一箇の所は座すまをて茶菓菓子のおもき容態あ
 日の鏡といふまをて安んずるもいぬの世も

かのまをて座すまをて見せはまをて入るは
 そのまをてまをてまをてまをてまをてまをて
 大海のやまを軒のまを排個て内を寝る子あらずあ
 詩といやういん投宿とてまを暫あつて出て案内するは
 一箇の所は座すまをて茶菓菓子のおもき容態あ
 日の鏡といふまをて安んずるもいぬの世も



却て人の嘲と生ずるはあり是を釈氏の作り出さるものには欲乃
 鉤とをえ引へ佛々たる事とて又経より吾門品のごす身應現
 の説子附會し楊柳觀音などのもの形艶靡にらんとてとて此経を
 生じたるものあり光明皇后如意輪の化身とてとて同具の説りしとて
 たりとてあて承國の人なりを人となしといふの化身誰の後身をて虚
 誕の説をあたす口破にのりてあは傳記に載て疑をのりて千百人
 の中二ものぶさもをかかむとてとて唐の聖孔子とて當時化身の
 説あり後世識緯の書を作りてより彼國も白生の精山門の靈ありとて
 せんゆちる國の人なりは悪法異人の人なりとてとてとて者多かり人
 あり佛菩薩神祇の化身ありとてとてのありて今日もあはて官相
 公と説くも時平義経と敵りたる権原と化身ありとてとて

こそ漏ちるとてなから虚誕の過言のあらんとて唯荒淫放蕩の
 行名とてく時にかきまら又同は説くも百人首に載らるとてあは
 彼方の二条の石末宮の御息方とてとてとて屏風に龍田川は紅葉とて
 たりとてとてとてとてとて題にえ系性法師とてとてとてとてとてとて
 就田川は紅葉教をてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 題にも應て類も風情ありとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 くの濁りてよとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 ますの侍とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 類とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 類あり類ありとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

癡痴とてとて先一定の類ありたりありて讀癡とてと
 ちのよその志ぬ者のいふことには癡とてとてとての非ありと
 ありきなり人癡ありてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 生をてててててててててててててててててててててててて
 文海云も知より和をたてててててててててててててててて
 耳く流儀の方ありてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 家の子げとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 とて風情も雲泥のまゝありてとてとてとてとてとてとてとて
 に傳ててとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 くと傳人仍の室まはて今日かく相見とてとてとてとてとてと
 昇仙の説をてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

さらし陽成院淨世とてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 永國子仙人のてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 久などと室に文海のてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 假形をわつて相見とてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 たりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 ちよまき寺のてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 つたえねねとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 林鹿へりてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 のがとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
 了書とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

將軍義輝弒りて多し都の騷動前年にはさりたり又も
 諸國よりさしあつてさしあつてさしあつてさしあつて
 守の何系許りてお詔したりとさしあつてさしあつて
 奇怪ありとさしあつて其論辨する所は皆確論せん信じて是より
 て思ふは業平と古今第一の良大夫といふも後世意柳の説に
 お詔のむし男とあつて概して業平と信ぜり又男と信ぜり
 度しなるあつて傳記の體貌用雅との信ぜり體貌用雅と
 との業平一人に限ると揚貴妃と宗の二難意ありといふも
 宮女も顔さあつてさしあつてさしあつてさしあつて
 人といふ類あり又妃は廣西普安縣雲陵といふ所の名に異
 質ありて揚康求とて女と後揚玄璋又康とてさしあつて

壽王の宮さしあつて其頃別人のさしあつても信ぜりよと云ふこと
 人多しより玉璽とてさしあつてさしあつてさしあつて
 此の類あつて聰明伶俐の論あり毛嬙西施といふも美人あつて
 宗高力さしあつて先にもさしあつてさしあつてさしあつて
 後にも君と若むむら芳加枝と好む胡皇ありは外國の名貴と
 似てさしあつて推したるも推してさしあつてさしあつて
 命とてさしあつて艶と称し文人と阿諛して天下の絶てて感さるる
 より衆大衆にさしあつてさしあつてさしあつて此國の人も
 と第一とてさしあつてさしあつてさしあつて其謬くとも皆同意に
 推度の説ありて海まへたり時とてさしあつてさしあつて
 觀念化身の説のごとくありて

覺明義仲と辭へ石山に隱る事

後白河院の寵臣女御言通憲入る信西とて下へ實範の曾孫實
 兼の息に友氏南家の儒流にて資性聰明類ひなく古今の流
 へ達し詩文の道す時流よとて時の人と其廣才に服しぬれども
 高階氏に苦みとて儒官に昇らぬとて登庸せしむる事
 其母も後白河院の乳媪ありとて帝即位のちより親を
 以て寵遇あり者あり後藤繁久通憲の名と信西ありて
 朝政を執り威福にあり遂に信賴を権を争りたり平治の
 乱より平相國信成又信西常に法皇に親近し平氏の短と
 ころを惜みて遂に歎死せりその門教くよめし其妻腹に重
 丸とて四才にたりると乳母懐き本津のちた居りしとて南都白福寺

の裏にのりて親とてわたり寺に送りて弟子の習とて父子の風のりて
 平治の事傳一日に十行と讀下はの聰明にしてつと多ありしとて
 の要たりとてとてく多入終りしは後大南京の傳燈此世にわたり
 といふなり或時乳母あり者存れりて四の成候しはつと信成といふ
 ありて又入道敷き平氏の跋扈と憤りて其權を奪ひて其子あり
 禍をうりてその子唐子のふまに早く出家し又君の善徳を
 つとむるに流るるにやと諸を問ひ終る云ふとてつとて其子あり
 といふなりつとてつとて相國の怒りしはよとて皆人のをりて
 といふ相國のつとてつとてあやせんは深くはて此寺の阿闍梨とて
 善く見え承知る人のよありとてつとてつとて賢人此まんとてつと
 ありてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつとてつと

死たりと情の平氏とて之を怨を報んとはせむにたれぬ九才の
 ひのふ師の所圍を剃度へて大坊貫明とぞ呼ぶる剃度の師
 とし多項技師の恩のまゝいふはあはれなり報讐の志は
 へのばとより出まるとぞいふはあはれなり報讐の志は
 等に達したる徳ありと師とたの明善無書にをせむの師
 其頃まゝ南都北嶺乃裏後やもまゝ合戦におも時を
 師の所圍を剃度の師の徳法王の干城もあまうとて
 聰明の智ありと情を棄ててまゝ九才の秋の頃より
 の大要とて運のゆきを強くとてあまう得て九才の秋の頃より
 行脚と被給りて南嶺を離れ今都を登りてまゝ居
 わるも平相國と刺くは怨を報んとはせむにたれぬ九才の
 相國也と云ふ事

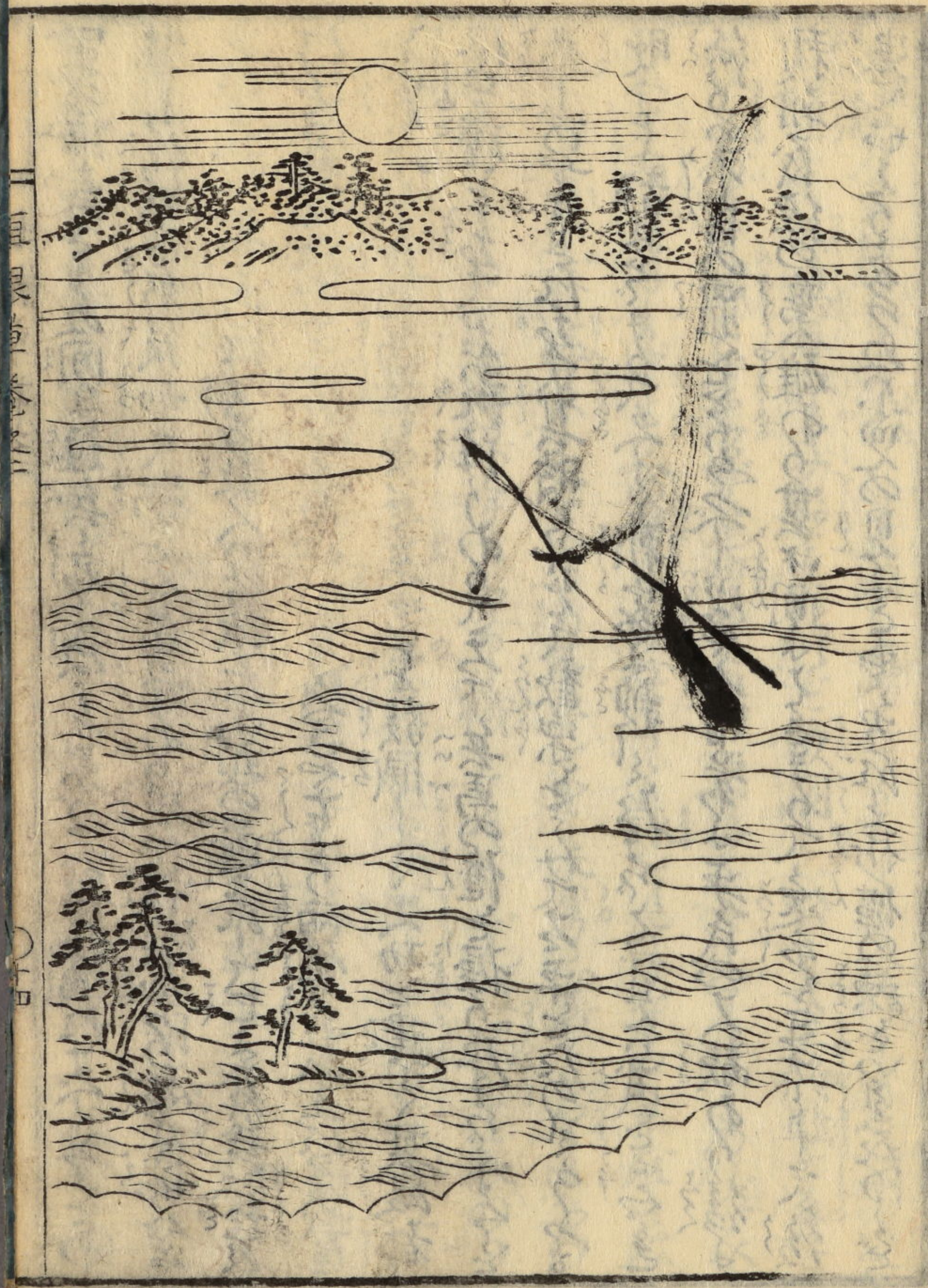
路と拂い入る侍衛雲のてくつて源氏の族を合ひとて
 其の敵をまゝ素直とてまゝあまう得て九才の秋の頃より
 まゝあまう得て九才の秋の頃より
 是れ相國の東にたつてまゝの夜の時勝あまう得て九才の秋の頃より
 隨身の侍の神をばあまう得て九才の秋の頃より
 たりと跡を晦して北にたつてまゝあまう得て九才の秋の頃より
 のれとて追捕をせむとてあまう得て九才の秋の頃より
 此れ先角なり其の身をまゝあまう得て九才の秋の頃より
 法中まゝの怪異ありと風國をまゝあまう得て九才の秋の頃より
 まゝあまう得て九才の秋の頃より
 まゝあまう得て九才の秋の頃より

義仲と云く義兵の侍ありていふことなきは彼人としてやそも軍
 とていふをせむと義仲の結行く相見とありは義仲云貴僧何り
 敵やとありありてまきくするや言明をんでまよ上音とのんたれん
 りくことなれどもよく平氏の残暴文人の悪むことありは法皇を
 難官に坐因しなる古今例あり不臣のあり公卿志と切りし中も
 かなんぞく後よ其毒多と云ひ諸派又執い微けつむあり
 自滅と侍の外所はなく平氏も多きことあり如も乱階と軍
 てその徳とくむむきた相四位人臣ときりり門留業違て元天
 下と二分し其二の平氏の領國とあり物とあり必り人臣業違
 息の理あり今春ありの天変ゆく兵亂の兆はく不臣の天変は
 たりまはる時人をして制さ時と虚く言はく人となすを紀元人とな

誠と云ふ傳とてなり君と云く源氏の嫡流諸國誰かありて
 をあふひ今も我をそえ上天子のあはし賊と討下又復のあり難
 報とてのあり白旗に因く群雄軍のどに多ん此時をむつり
 其は昔人の下に居はるん賢者と云く之も席をおくすむは義仲
 も席を前く誠は公論とてなり家もあはしも指揮はあらん
 ども内府中盛よく流を侍て門の仕儀あり家もいと侍とありは
 其の句云重盛一人の徳門の墨を掩にたど一杯の水一東の勢の力を消
 することありは流を重盛と云ふ所の相見とての死んで其後とては
 ば君とてまよと圖り多しとあり義仲もいひはるる人となすは志を
 ともぬとて謀士と侍とて侍とて侍とて侍とて侍とて侍とて侍と
 家はあはし房諸葛かあり別館と侍とて侍とて侍とて侍とて侍と

静ありともさるるの令旨諸國一平しむらんも伊皇の頼朝本當
 の義仲とて義兵を起して攻奪りてさるる下へ其の功をなして
 義仲追討のたて入軍と向りしるる明計策に六波羅を討ち
 けり負て敗走すすむ後を著るる北陸の軍潮の傍に殺到す
 るは此彼の時とゆるる源氏舊恩の誦士地加りて治平に乱入す
 社のもと下其兵聲うらむとのまじり平氏の門一戦もはるる主上
 門院を供奉しあむ陸家の木の枝をさへばらるる西國とて
 波羅と義仲都よ入て法皇の御所よりあむ御感銘するは備も平氏の
 一統とてしるる禍の根とてら辰禮と安んぶすとの勅をさへ入都
 軍馬の芳と体む御も義仲北陸より入一圖報雙の念よりあむ
 智ん都流留のしら目回す所生涯も馴れ繁花風流水とて

かろくくむ東門圍赤女雲のどろりともいふ所の敷る人宮人乃
 いかんともあつていふともさるる賤の女を鄙ふはけしむ不曾の山
 よまむ同もさるる俗ともわゆるまむ六波羅の法備入度高樓玉と
 りりづら海をかざるる者後とるるりりりり情をけりてから地れ下
 平世の歡樂とけりともあむ人世のらたはまむともさるる女とあむゆえ
 早夜淫酒とまむとも軍勢とあむともさるる戦の入功に物入放
 逸の兆とてさるる明諫と云君世所は逸樂と欲くも入文室に
 燕もさるる大禍忽ちも平氏敗走すともさるる多々恩顧の者西
 國もさるる虎と放りも入を執と追り淵も波りもさるる
 要害と固りて敵も備入上神器と扱入諸國も合もけりも勝
 るも軍とさるる侍は兵の神速と貴もさるる君の志もさるる



柳巷

義仲のすまひとく其身鎌倉より天下の兵權とせりて是の
 義仲と諱とことと傳へ國をわたりて義仲と其諱と月ひつた
 今日わんや後よは滿離とさるの天に下りて是より覺明と名水
 せりて其所をたたりて後文治五年義經の門より自教へ海内
 多く鎌倉のよに居りて建久二年頼朝と洛へ國と謝は法皇
 の御心をやく數日洋留のち和由之玉堂の若殿系出候の暇とせ
 たりて湖水に舟とせりて石守に請へ侍りて頃も満月にて心
 あり影の湖水にうつりて今も波煙の樹木とせりて又國の
 わりて疑り風情の堂の欄と居りて人月よりはと樓と朝新
 一人白霧山深鳥一聲とつたまじ一人の月よりはと樓と朝新
 たり佛あり燈挑居りては師のちとせりて月よりはと樓と

こゝのわりのまじりて獨りて國をわたりて各名と侍りてこの世のまじりて
 けわいといざね清談とせりてまじりて徒者とて人月よりはと樓と朝新
 たりてまじり影とありて遺憾のこゝにまじりてはと樓と朝新
 の二句を公にせりて趣とせりて得たりたりて夜とせりてはと樓と朝新
 頼朝とせりて語りてまじりてはと樓と朝新
 たりてまじりて侍りてはと樓と朝新
 次の日頼朝と諸のほりてまじりて夜とせりてはと樓と朝新
 必定とせりてはと樓と朝新
 たりて國とせりてはと樓と朝新
 たりてはと樓と朝新
 たりてはと樓と朝新
 たりてはと樓と朝新

